

01・サキュバスになった友達が、別人みたいにえっちに誘惑してきてエロキス連打してくる

へシチュエーション

前日譚トラック01から少し後。

七月四日（木）十二時過ぎ。

主人公と詩音が通う「音海（おとうみ）学園」の屋上。

主人公が詩音の連絡を受け、大慌てで屋上へやってくるところからスタート。普段屋上は開放されており、それなりに人がいるはずである。

だが、今日はなぜか詩音しかない。

主人公はそれを不思議に思いながらも、体調を崩しているという詩音に駆け寄っていく。

詩音の一人称は『私（わたし）』と『あたし』。

詩音の二人称は『委員長』と『いいんちょ』と、それぞれ二種類ずつある。

しかし、この使い分けに特に意味はなく、その時の気分や、前後のセリフに合わせて言いやすい方を選んで話している。

SE1 主人公が屋上に向かう階段を上る音

【最初から最後まで流す】

SE2 主人公が屋上の扉を開けて、閉める音

【最初から最後まで流す】

【『開いた音』がした段階でSE3と重ねて流す】

SE3 屋上の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【SE2の『開いた音』がした段階でSE2と重ねて流す】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

SE4 主人公の足音1

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「詩音ちゃん……！」

主人公、屋上のドアを大慌てで、だが詩音の体調を慮って丁寧に開けると、一直線で詩音の座っているベンチまで駆けつける。

詩音はそれを、ベンチに座ったまま、ぼんやりと見上げる。

● 【9】 下50センチ

■ 屋上にある、ベンチに座った状態で話す。

自分の為に屋上までやってきた主人公に、何とか挨拶をする。

本当なら、無理を言ってきた主人公に、少しでもお礼の気持ちを伝えたい。

なので、最低限立ち上がるべきなのだが、それもできないほど、とにかく具合が悪い。

本当は、主人公が来てくれた事が、嬉しくてたまらない。

感動で泣きそうだし、飛び上がりたい程嬉しいが、身体がまるでついていけないのだ。

それが申し訳なく、悔しくて申し訳ない。

だが、その気持ちすらも表現できない程、今は体調が悪い。

主人公に『呼び出しておいて、なんだこの不愛想な態度は』と不快に思われないかと、

心配で仕方がない

「『非常に身体がだるくて重いが、何とか返事をしている』という感じで。極端にダウンーに、けだるげな様子で。

しばらくはこのまま聞き手に一度、このような『クールで淡々としており、とても主人公に恋愛感情があるようには見えない』人物だと誤認させる』

ああ……。

どうも。

●※大げさなほど『ぶん』と勢いをつけて頭を下げながら※ 話す

「『非常に身体がだるくて重いが、何とか返事をしている』という感じで。極端にダウンーに、けだるげな様子で』
どうも。

■全身全霊で、必死にお礼と謝罪をする。

だが、傍目にはその気持ちがおぼ伝わらない程度で

●※深々と頭を下げたまま※ 話す

「ダウンーで淡々とした中に、少しでも感情が見えてきた感じで。

詩音としては、今できる最大限の力でお礼と謝罪の気持ちを伝えている」
ほんとに……どうも。

●※一度、頭をあげた後、また『ぶん』と勢いをつけて頭を下げながら※ 話す

「自分なりに必死にお礼の気持ちを伝える。

せめて頭の動きだけでも、気持ち伝えたいので」
どうぞ……どうかよろしくお願いします」

〈主人公〉

「あ、あの……。大丈夫だよ、詩音ちゃん、そんなに頭下げなくて。少しでも、休んで。具合悪いの、わかってるからね」

●【9】 下50センチ

■ どうか自分の容態を伝えようとする。

『自分は今このように具合が悪いので、まともに会話ができない。だからこの態度は決して心からのものではなく、不可抗力なのである』と言い訳がしたい

● ※ここからは顔をあげて元に戻って※ 話す

「『ダウンーで淡々とした中に、少しでも感情が見えてきた感じで。

とにかく具合が悪そうに、ゆっくりと」

……ごめん。

今、全然言葉が出てこなくて。

うまく喋れないんだ……。

【『貧血ん時』 Ⅱ 『貧血の時』】

頭、ぼーっとする感じ。寝不足とか、貧血ん時みたいな……」

〈主人公〉

「わかるよ！ 気にしないで！」

●【9】 下50センチ

■ものすごくホッとして。また『いいんちよは昔と変わらず、いつでも優しいなあ』と、主人公の想いを募らせている

「【具合が悪そうだが、少しホッとした様子で】

……わかる？」

……そっか。ありがとう」

〈主人公〉

「頭がぼんやりする事以外に、つらいところはある？
頭痛とか、吐き気とか……」

●【9】 下50センチ

■さらりと嘘をつく。本当は頭、背中、腰のあたりに激しい痛みがある

「少し声が穏やかに、優しくなる。

緊張がほぐれたような感じで」

……うん。他は大丈夫。

頭痛とか、吐き気とか、そういうのはいよ」

〈主人公〉

「よかった……」

●【9】 下50センチ

■心配そうな主人公の顔を見て、ますます胸がきゅーんとする。

また、考えれば考えるほど『来てもらえたのは、主人公の人柄が優しすぎるからだ』と実感する。『こんな突拍子もない打ち明け事とお願いをして、信じてすぐに助けに来てくれるのは、主人公位だ』と思っている

「【少し声が穏やかに、優しくなる。

緊張がほぐれたような感じで」

ふふ。優しいね。

【具合が悪くダウンした状態なりに、実感と主人公への愛情を込めて。

『てか』Ⅱ『ていうか』

『意味、わかんなかったでしょ』 Ⅱ 『先ほどの電話で話した内容は、さぞ意味不明だったでしょう』

ほんと……優しい。

普通、来ないよ。こんな急に呼ばれてもさ。

てか意味、わかんなかったでしょ」

〈主人公〉

「……来るよ。詩音ちゃんが辛そうだって、伝わってきたから」

● 【9】 下50センチ

■ 内心、ちよっと泣きそうになる。

主人公をこれ以上心配させたくないのでも言えないが、実は頭痛もするし吐き気もひどい。さらに、頭頂部の骨、背骨、尾骨に突き破るような激しい痛みがあり、気を抜くと今にも気絶しそうなのである。

本当は今すぐこの痛みを訴えたい。だが、言うといよいよ『病院へ行こう』と言われてしまうだろうし、行った所で病院ではこれを解決できない事もわかっている。

詩音はこれらの痛みが、自分の身体にサキユバスの特徴が表れようとしているためであると、わかっているのだ

「【具合が悪くダウンな状態なりに、ちよつとだけ泣きそうな声になる。

それをこらえて、主人公に感謝の想いを伝える】

はは……そっか。

ほんと、来てくれてありがとね。

いいんちよが居てくれて助かった。

こんなの、他の誰にも頼めないからね」

〈主人公〉

「……あはは。その呼び方、何だか懐かしいね」

●【9】 下50センチ

「『『ん？』と優しく聞き返すような言葉の後に、『ああ、そういえばそうだ、これはとても古い呼び方だ』と思い出した感じで」

ん？

ああ……そっか。もういいんちよって呼んでるの、あたしだけか」

〈主人公〉

「そうだよ。実際は委員長ですらなかったしね」

●【9】 下50センチ

■身体は辛い、主人公と会話していると、それだけで心が楽になるような気がする

「【少し楽しげで、つられて体調も良くなっているような感じで】
ふふふ」

〈主人公〉

「もう、昔同じ学校だった子以外は覚えてないんじゃないかな？」

『委員長』って呼び方」

●【9】 下50センチ

■主人公がかつて、クラスで『委員長』というあだ名だった事、その由来について述べる
「【何気ない内容を話している中に、主人公への愛情と尊敬の気持ちがにじんでいるような感じで】

そうだよね。

何（なん）か、頭良くて、頼れるから、皆（みんな）『いいんちよ』って呼んでたけど。
ほんととは別に何（なん）かの委員長とかじゃなかったもんね」

〈主人公〉

「そうそう」

●【9】 下50センチ

■今も自分が主人公の事を『委員長』あるいは『いいんちよ』と呼び続ける理由を述べる
「【何気ない内容を話している中に、主人公への愛情と尊敬の気持ちがにじんでいるような感じで】

……でも、あたしの中では、いいんちよはずっと『いいんちよ』って感じ」

〈主人公〉

「え？」

●【9】 下50センチ

「【何気ない内容を話している中に、主人公への愛情と尊敬の気持ちがにじんでいるような感じで】

優しくて。

困った時、こうやっていつも助けてくれるから。

『委員長』ってなんか、そういうイメージの感じじゃない？」

〈主人公〉

「あ、ありがとう……」

ああ、そうだ。話してる場合じゃ、ないよね。

えっと、それで……」

●【9】 下50センチ

■『ああ、そういえばそうだ、自分は訳あって主人公を呼び出したのだ』と思い出した感じだ。

本当は忘れる訳がない。

だが、詩音にとってこの件は、自分から切り出す事にはあまりにも強い抵抗と申し訳なさがあるものだ。

詩音はこれから主人公に、自分の体調不良を和らげるためだけにセックスをしてもらう。

これは我ながら、何度反芻しても異常で突拍子もない頼みである。

だが、主人公は二つ返事で了承して現れた。

おまけに彼女は『セックスをする』はずなのに屋上に呼び出されたという矛盾にさえ、疑問が及んでいないようだ。

つまり、ただただ詩音の事だけを案じて、血相を変えてやってきたのである。

この反応に、詩音はどうしても期待してしまう。そんなの、するだけ無駄だとわかっているのに。

何せ主人公という人間は、とにかく人が好い。

彼女は、それが誰であろうと、その頼みは何であろうとどんな時でも他者に親切にする。

まるで、それこそが自分に与えられた使命かのように、躊躇なく優しさを振りまく。

そんな、見ているこっちが不安になるほどの善人であるという事を、詩音は痛いほど身にしみて理解していた。

だから今も、自分が彼女にとって特別な人間だから来てくれたわけではないと、重々承知しているつもりだ。

そもそも応じてくれたのも『初めてではないし、詩音の一大事だから』だ。

とにかく主人公は、詩音に恋愛感情があつてここにいるわけではないのだ。

その事実……特に『すでに性経験を済ませている』という点に詩音の胸は締め付けられたが、主人公ほどの人であれば、それは自然な事だろうとも思った。

それに、それでも詩音にとっては十分すぎるほど嬉しい。主人公が今、自分の心配だけをして駆けつけて、身を捧げようとしてくれる事が嬉しい。

詩音は見た目こそ近寄りがたいが、恋愛面では昭和の乙女のように奥手で怖がりな陰キヤである。そのせいでずっと想いを打ち明けられず、何年も時間を無駄にしてきた。

それでも、それでも今ならば積年の想いを告白できる気がしたが、今度は話すのもやつ

との体調に足を引っ張られている。

つくづく、ままならない。己が情けない。そう思いながら返事をする

「……あ。

●※気まずそうに少し間をあけてから※ 話す

「少し気まずそうに、申し訳なさそうに、また恥ずかしそうに。

すでに了承を得ているとはいえ、今から自分が主人公にする事は、どうしても申し訳なさが勝つので」

ああ……うん。

そうだったね……申し訳ない。

●※少し間をあけてから※ 話す

■一聴してほとんど変化がないが、実は最大限の勇気を出している
じゃあ……早速すぎてごめんなんだけど……。

●※少し間をあけてから※ 話す

【『いい、かな』 Ⅱ 『キスしてもいいかな』
いい、かな」

〈主人公〉

「……うん」

● ※移動※

● 「1」 下20センチ

■ 詩音はベンチに座ったまま、主人公の方が近づいてくる。

主人公が詩音の正面に立ち、それを詩音が見上げている状態

「【今にも気絶しそうなほど体調が悪いなりに、最大限主人公に配慮した言い方で】
目え、閉じてくれる？」

〈主人公〉

「ん……」

● 「1」 下20センチ

「【小さく息をつく。】

わかりやすく緊張した様子で】

……ふう。

【※6回※ 呼吸する。

本人としては深呼吸しようとしているがうまくいかない。
とても緊張した、かつ具合の悪そうな荒い呼吸。

『少しゆっくりかなりゆっくり』になる』

はあ、ふう、はあ。

はー……すー……はー……。

【少し切なげに。『するよ』Ⅱ『キスするよ』】
……するよ。

●※移動※

●【1】 下20センチ〜0センチ（通常の高さ） 0センチに移動しきってからキス

■主人公が小さく頷く。

その、あまりにも真剣な表情に『とてもキスする時の顔じゃない……』と、思わず少し笑ってしまいそうになる。

それから、主人公からも顔を近づけてもらう形で、キスする

【小さく呼吸を漏らしてから、遠慮がちにキスを始める。

以後、※マークまで、吐息交じりにキスする。

いかにも『初めて』っぽい、一回一回をゆっくり行う、ぎこちないキス。

一行ごとに少し間をあけて、露骨に下手そうな感じにして、その後とのギャップを強調する。

吐息はゆっくり切なげに】

んっふ……ちゅっ♡

ふううつ……はあ。

ちゅ……ちゅっ ♡

はああつ……。……ふー……ふー……。

……はあ……ちゅっ ♡

ちゅ ♡

ちゅ ♡ ちゅ ♡

ちゅっふ……ちゅくっ ♡

【唇を離す】

はああつ……。…… ♡

※

■唇を離し、唇についた主人公の唾液を本能的に舐める。

その瞬間、心臓がどくつと跳ねる。

それとともに全身の血が駆け巡り、大きく脈動するのを感じる。

途端に身体の調子がよくなり、先程までの痛みが、嘘のように消え失せていく。

そんな驚きとともに、詩音はとてつもない速度で自分という存在が塗り替えられ、新しくなっていくような感覚に陥る。

まるで突然強く腕を引かれ、違う世界に引っ張り込まれたような気分なのだ。

うまく説明できないが……たとえば、これまでの自分なら絶対にできないと思っていた事が、今はたやすく叶えられそうな気分である

「ダウナー気味でありつつも、素直に驚いたような声と正直な感想を漏らす。

だが、まだ心がついていかず、ぼーつとした感じで」

……っ、凄い。

何（なん）かいんちよの口、凄い美味しい」

〈主人公〉

「お、美味しい？」

●【1】 通常の高さ（以後また上下の指示があるまでは、この高さを維持）

■自分の身に起きた変化を確かめたい、確かめずにはいられないという衝動に襲われる。

じわじわとキスの喜びと感動が全身に押し寄せ『もつとしたい』『もつとあの甘美な瞬間を味わいたい』という欲望に抗えなくなっていく。

そんな自分を『おかしい。自分はこんな人間ではない』と思いつつも、気持ちを抑えられない

「【果然と、ぼーつとしながらも、いたく感動した様子で。

まだダウナー気味だが、話すのはかなり楽になっている感じで。

以後、※マークまで、話しながら、脈絡もなくキスする」

うん。美味しいの。

【『美味しさ』を確かめるように、さらっとキスする】

ちゅ♡

何（なん）か……甘い？

いや違うか……ちゅっ。

【『なんてんだろ』 Ⅱ 『なんていうんだろう』】

なんてんだろ……この味。

ちゅ♡

■ いつか、姉から聞いた『淫魔の血が目覚めると味覚が変わる』という話を思い出す

【独り言のように。説明不足で、主人公を置いてきぼりにしている事も忘れている】

『味覚変わる』ってのは聞いてたけど。マジなんだね。

【ぽかんと、不思議そうに】

何（なん）でだろう……？

■ 衝動の赴くまま、当たり前のようにキスを繰り返す。主人公の唇を、愛おしげに舐める

ちゅ……ちゅ……ちゅっ♡

れええっ……♡

【優しくけだるげに。

ここから少しずつ『ダウンーでセクシー』な雰囲気になっていく】

でも……『何（なん）で』とか考えてもしようがないか。
もう。ありえない事しか起こってないもんね。

【キスが深くなる。

先ほどのキスとは明らかに違う、ゆっくりと余裕のある、ねっとりしたキス】

はあんむ……れるっ♡

ちゅっぶ……ぶちゅっ♡

れえろ、れえろ、れえろ、れえろっ……♡ ※

【優しくけだるげに、ぼそっと】

……『私の中の淫魔の血が目覚めちゃった』なんてさ」

〈主人公〉

「……♡」

●【1】

■主人公とのキスが気持ちよすぎる。

キスする毎に圧倒的な生のエネルギーが流し込まれ、うっとりするほど満たされていく。
理屈はまるでわからないが、自分をこの状態にしてくれたのは間違いなく主人公だ。

あの激しい苦しみから救ってくれた主人公への感謝と愛情で一杯になり、そしてそれ以

上の激しい性衝動が襲ってくる。

だが、痛みから解放された事で、多少理性的にもなる。

今すぐにでもなし崩しの主人公に襲い掛かりたい気持ちをこらえて、まずは体調をより安定させるためのキスにとどめる

「うっつりと息を吐く」

ふううつ……♡

【優しく、少し甘えたようなセクシーな声で】

ごめんね……もう少し、させてね。

【※しばらく※ キスを繰り返す。

甘く優しく、主人公の唇と舌を堪能するようなキス】

ちゅ♡ ちゅっ♡ ちゅ♡

ちゅくうつ……♡

れれれ……ちゅふっ♡

【うっつりと息を吐く】

ふー……♡

【独り言のように。説明不足で、主人公を置いてきぼりにしている事も忘れている】
……ありがとう。これで、いけそう」

〈主人公〉

「？ いけそう……って？」

●【1】

■まだ少しだるさは残るが、問題なく思考したり、話したりできるようになっている。それからふと、今の『主人公を立たせたままキスしている』という体勢をもどかしく感じる。

このままでは自分とはもなく、主人公は随分と辛そうだと考える余裕が出てくる

「【けだるそうにしつつも、誠実さが感じられる様子で】

えっとね……上手く説明できないけど。

おいおい、話す。

●※移動※

●【7】

■主人公の左耳に話しかける。

こんな事、今までの詩音には絶対できなかった。

つまり、詩音は早速『これまで絶対にできないだろうと思っていた事が、今は簡単にできるような気がする』という先程の感覚を裏付けたのだ。

これはささやかではあるが大きな進歩である気がするし、また、決して踏み出してはな

らない一歩であつたような気もする。

その上この『やりたい事をやってみたい』という気持ちは、制御が極めて難しい。

『やりたい』と思つた瞬間、自然と、当然のように実行しようとする自分があり、引き留められない事があるのだ。

さらに、自分でもよくわからない位、全身が不思議な余裕に満ちてくる

「ちよつと甘くサキュバス感が出てくる。※特に聞き手をドキツとさせるイメージで※聞き手に『あれっ？ なんだかさらにセクシーな雰囲気になったな』と思わせる。

『ぎゅー……ってしながら』 Ⅱ 『抱き合いながら』

……てか、もつとこち来て？

ぎゅー……ってしながら、話そ」

〈主人公〉

「あ……」

SE5 主人公が詩音の隣に座る音

「最初から最後まで流す」

SE6 詩音が主人公を抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

【小さな音量で流す】

●【7】

■主人公をベンチの隣に座らせると、その左耳側に頭を置いて、主人公を抱きしめる。

それから、くっつけた胸越しに、主人公の体温や心臓の音を感じとる

「【ひそひそとささやくように。】

嬉しそうに、思わず少し笑ってしまっている。

聞き手に『あれっ？ さっきまであんなに具合が悪そうだったのに、今は随分余裕があるな』と思わせる」

ふふ。いいんちよ、めろっっちゃあったかいね。

心臓。凄いバクバク言ってる」

〈主人公〉

「詩音ちゃんだって……」

●【7】

■自分の行動なのに、まるで自分のものではないような気がしている。

本来の詩音なら、こんな会話は絶対にできない。

好きな人を抱きしめながら通常通り会話するなんて、絶対にできない。

なのに今の詩音は、余裕でそれができてしまっている。

自分でもなぜこんな事ができるのか、詩音自身、まるでわからないまま、ただ心のままに行動する

「私も？」

【感情表現は控えめだが『楽しそうだ』というのが伝わる感じで笑う】
はは。そうだよ。

【※※までささやく※】
ひそひそと嬉しそうに。

告白の言葉なのに、さらっと、とてもあっさりと言う】
すんごいドキドキしてる。

だって、私はいいんちよの事、ずっと前から好きだったし」※

〈主人公〉

「え？」

【最初から最後まで流す】

【次の『詩音』のセリフと同時に流す】

● ※移動※

● ※移動しながら、余裕ありげに※ 話す

● 【1】

■ 主人公の首の後ろに両腕を絡めながら、何事もなかったかのように会話を続ける。

『とうとう主人公に告白してしまった』という胸の高鳴りで心が一杯のはずなのに、なぜか普通に会話できてしまう自分が不思議でならない。

自分の心と実際の行動のズレが、どんどん大きくなっている。

しかもそのまま『いつから主人公を好きだったのか』という、主人公が今一番疑問に感じていた事を、すんなりと話し始める

「【優しく、さらっと。余裕のある声で】

そうだよ？

もう、十年前？ 初めてクラス同じになった時から、好きなの。

【ナチュラルでありつつ、ちよつといたずらっぽく】

知らなかった？

【優しく笑って。】

『それも当然か』『気づいていないのが、本当に主人公らしい』という感じで」
……知らないか」

〈主人公〉

「……！ あっ……。えっと……」

●【1】

■自分が主人公に恋したきっかけの出来事を語る。

すっかりうるたえている主人公の事が、愛おしくてたまらない。

『さすが、人に優しくするのが当然の人だ。どれだけ他人に尽くしても、その結果好かれてしまうなんて、考えもしないのだ。自分のうかがい知らぬところで、恋愛だっていくつも経験してきただろうに』と思うと、つい笑ってしまう

「【優しく笑いながら、とても穏やかに。『園』Ⅱ『幼稚園』】

じゃあさ……こっちは覚えてる？

園の、お泊まり会の時。

私全然眠れなくてさ。夜、一人で泣いてたの」

〈主人公〉

「ああ……！」

●
【1】

■ 『こちらについては覚えていたらしい』とわかり、嬉しくなる。

詩音にとっては、これが主人公との思い出の中で、最も大切なものなので

【そのまま、思い出をいとおしむように語る】

そしたらさ。もう先生も全然来ないような時間だったのに、いいんちだけは起きてきて、気づいてくれてさ。

それで、『こっちおいでー』って、一緒に布団に入れてくれたじゃん。

【さらっと言いつつも、主人公への想いがにじんでいる感じで】

……その時から、好き」

〈主人公〉

「……………！」

●
【1】

■ 主人公が照れたように、恥ずかしそうにもじもじしているのがかわいい。

『好きだなあ』と思う

「優しく笑いながら、とても穏やかに。

『長いでしょ』 Ⅱ 『長い期間の片想いでしょ』

ふふ。長いでしょ。

【話しながら、脈絡もなくキスする】

だから……ちゅ ♡

【ダウナーでありつつも熱っぽく。

『いいんちよ以外』 Ⅱ 『主人公以外の人物との性的接触』。

ここから、声に熱がこもり始める。

主人公へのじっとりとした執着をにおわせるようになる】

いいんちよ以外は嫌だった。いいんちよ以外じゃダメだった。

だから……来てくれて、かなり浮かれてる。

■ 気持ちがどんどん言葉になって溢れていくも、それが『重い』『受け入れてもらえないかもしれない』事なのはわかっている。なので、少し抑える

【ちよっと自嘲して】

ごめん。舞い上がってて。

■ でも、結局抑えきれない。もう主人公に触れたくてたまらなくなる

【切なげにため息をつく】

……はあ。

【ダウンーでありつつも熱っぽく、真剣に】
……好き。めーっちゃ、好き……♡「

〈主人公〉

「……んっ……♡」

●【1】

「【※しばらく※】キスする。

話しながら脈絡もなくキスを始め、どんどん熱のこもった濃厚なキスになっていく。
序盤は舌を絡ませるデープキス、後半は口の中を舐めまわしているようなキス。
それを完全に無意識に、欲望のまま自然に行っている感じ」

はああっ……ふちゅ♡

ああんむ……ちゅっ♡

ちゅ♡　ちゅ♡　ちゅ♡

ちゅばあ……くちゅっ♡　　んんふ……れろおっ♡

えれ、えれ、えれ。

えれ、えれ、えれ♡

【※6回※】呼吸する。

興奮気味の、ゆっくりとした荒い呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はああつ……♡

■キスを終えた途端、また、未知の感覚が奔流となって押し寄せる。

それは、これまでの自分の視力では到底捉えられないほどの小さなものが突然見えるようになって、その密度に圧倒されるような感覚だ。

だがほどなくして、詩音はそれが『全て』に対してではなく『主人公に関して』だけだと気づく。

キスのせいだろうか。急に、主人公という人間の事『だけ』が、確信をもって『わかる』ようになってきてしまった……

【ダウナーだが、明らかに何かに驚いている様子で】

……ん？

●※少し間をあげてから※ 話す

【これまでにないほど、驚いて困惑した感じで。

一度先程までの『余裕ありげでセクシーな雰囲気』が消え失せる】

……あれ？

●※少し間をあげてから※ 話す

【ますます、あからさまに困惑して】

……えっ？」

〈主人公〉

「……ん……？　どうかしたの……？」

●【1】

■『嘘だ、信じられない』という気持ちで。

詩音はたった今、主人公がついた嘘に気づいてしまった。
何の根拠もないのに、完全にそれが嘘だと確信している。
しかも、その嘘は自分のため。

詩音に罪悪感を抱かせないものだと思っていたので

「【あからさまに動揺して。

もごもごと、申し訳なさそうに。

『こんな事を尋ねる事自体、失礼なのはわかっているんだけど』という感じで」
あっ……いや、その。

●※少し間をあけてから※　話す

……あの。

●※少し間をあけてから※　話す

もし嫌（や）だったら、答えなくて、いいんだけど」

〈主人公〉

「……うん？」

●
【1】

「【呆然と、困惑と申し訳なさが入り混じった声で。

『嘘だよね。私の勘違いだよね？』という感じで」

もしかして、キス。ほんとは初めてだった……？」

〈主人公〉

「あっ……」

●
【1】

■その時主人公から漂う『匂い』で、目を泳がせるぎこちない態度で、詩音は、己の指摘が正しい事を確信する。

やはり仕組みはまるでわからないが……おそらくこれは淫魔の能力で、そのトリガーはキス……あるいは、主人公から摂取した唾液であったようだ。

詩音は推測する。もしかすると淫魔は……というか『淫魔になる』と、性的に接触した人間の情報を深く読み取れるようになるのではないかと。

であればこの感覚にも説明がつく。

詩音は先程のキスで『主人公は先程『自分はセックスの経験がある』と言っていたが、それは絶対に嘘だ。実際はこれまでに一度も他者と性的なふれあいどころか、キスもした事がない』と確信した。

それは主人公の反応や、技巧といったものから判断したのではない。

ただ、赤い色を赤と呼ぶような絶対の自信で『そう』だと思ったのだ

「【息遣いのみで表現する。

真剣に。固唾をのんで主人公の言葉を待つ】

……」

〈主人公〉

「えっ……と……。その……」

●【1】

■途端に、途方もない喜びに満たされる。

本来の詩音なら、もっと複雑な思考をするはずだ。

正直に言えば、主人公に性経験がないとわかった時はホッとした。

詩音の主人公への想いは少々歪んでいて、はっきり言ってしまうえば、彼女の善良さや素直な優しさを信仰するあまり『性なんて穢れたものを知らないでほしい』『もっと言えば、処女であってほしい』と願っていたからだ。

だが、それは詩音の勝手な希望である。

実際に主人公がどう生きるかなんていうのはもちろん自由だし……そもそも、主人公に嘘をつかせた事や、『彼女の大切な初めての経験を奪ってしまった』事を申し訳なく思うという真つ当な人の心があれば、とても喜んではいけないはずだ。

しかし、今の詩音には、説明のしようがないほどの喜びと征服感しかない。ただ嬉しく、幸せて『やった』『よかった』などという、単純な感情だけが心を支配している。

もしかすると、これが淫魔になるという事なのだろうか。

人間らしい優しさや思考を失い、欲望に突き動かされるまま生きる怪物になる事が『淫魔の血が目覚める』という事なのだろうか。

詩音は怖くなるが、それだがまだ己の思考を『おかしい』と考える良心はまだあり……それが詩音の反応を比較的正常なものにしていた

「【喜びを抑えきれない感じで。

失礼だとわかっていながらも、止められない感じで」

……っ
♥

●※少し間をあけてから※ 話す

■先程の通話での主人公の発言について尋ねる。

詩音が電話で主人公を呼び出した時、主人公は嘘をついたとわかったので。

『主人公の秘密を、結果的に暴いてしまった』『主人公が『詩音の為に』とついた嘘を台無しにしてしまった』『しかもその経緯を、自分の口から伝える』という事については、まだ、正しく罪悪感がある

【申し訳なさそうに、少し気まずそうに】

あー……やっぱりそうなん、だね。

●※大きく息を吸ってから※ 話す

【緊張気味に、だが真面目にたずねる。

こうなってしまったからには、はつきりさせないといけない事なので】

じゃあ、さっき電話で『キスもえっちもした事あるから、全然OK（オッケー）。手伝える』……って言うてくれたのは、私の為？」

〈主人公〉

「……………」。

……………うん…………………………」

●【1】

「真剣に、優しい声で。」

主人公の優しさに心打たれて」

ほんとは違うのに。初めてなのに。

『私が困ってるから』って、嘘ついて来てくれたんだね」

〈主人公〉

「……うん。ごめんね。嘘ついて。」

その方が気楽かなって思ったんだけど、バレちゃダメだよね。

かえって気を遣わせちゃった」

●【1】

■喜びをかみしめる。同時に、どこまでも善良な主人公と話していると、自分も浄化されて、正気に戻るような気がする。

先ほど感じた『ただ嬉しい』という気持ちを必死でかき消し、できるだけ本来の自分らしい、きちんと主人公に寄り添った対応をしようと努める

「優しく、真剣に」

ううん。嬉しいよ……。

【少し慌てて、申し訳なさそうに複雑な想いを伝える】
って、嬉しいって思っちゃダメなんだけど。

【結局こらえきれずに、喜んでしまう】
……でも、嬉しい。

【真剣にお礼の気持ちを伝える】
ほんとに、ありがとう」

〈主人公〉

「ううん……。でも、どうしてそれを……？」

●【1】

「『しまった』という感じで」
あっ。

【少し慌てて、少々気まずそうに説明をしようとする】
えっ……とね。

何（なん）……でわかったかって言うと、上手く説明できないんだけど。
【少し慌てて、申し訳なさそうに補足する。

『決してそのような、技巧的な問題ではない』という感じで。

『あでも』 Ⅱ 『あ、でも』がくつついた状態』

あでも、キスの上手い下手でわかったとかじゃないよ。

● ※少し間をあけてから※ 話す

【ぼつぼつと。

言葉に迷いながらも、自分の推測を交えて、感覚的にはあるが、誠実に回答する】
ほら……私、サキユバスになっちゃったでしょ？

多分、そのせい。

サキユバスになって、いいんちよとキスしてから、何（なん）か、突然ピンと来たの。

【『ふわあ』って』 Ⅱ 『不思議な感覚が直接脳に訴えかけるような感じで』

『ふわあ』って伝わってくる……みたいな。

今もね。何（なん）か、鮮明にわかる。

何（なん）て言えばいいかな……うーん。

【少しいたとえを思いついて】

……あ。

他の人の事は、ボロボロの雑魚画質だけど、いいんちよだけ4K（よんけー）、みたいな。一人だけ、くつきりして見えるようになった。

■ 『鮮明にわかる』と自分で言った瞬間、一瞬、強烈に主人公の想いのようなものが伝わってくる。

それを正確に受け止める事は、今の詩音にはできない。

だが、主人公が自分とのキスを不快に感じておらず、それどころか、心のどこかで『これ以上』を求めているらしい、という事は感じ取れた。

予想だになかった事だが、主人公は性的な行為に、人並み……いや、相当の興味関心があるようだ。

そして、行為を共にする相手は、詩音でも構わないと思っているらしい……

【『ほんとなら』本来なら】

だから、ほんとならわからない、私が知ってるはずがない事までわかる……みたいな感じ」

〈主人公〉

「なるほど……？」

● ※移動※

● 【3】

■ 主人公の左耳に話しかける。

再び甘く誘うような声が、自然と出る。

自分でもなぜこんな切り替わりが起きるのか、まるでわからない。

……だが『今』押せば。『今』指摘すれば。

主人公が流されてくれそうな事はわかる……

「【再び、ちよっと甘くサキュバス感が出てくる。

※特に聞き手をドキツとさせるイメージで※】

……だからね、わかったよ。

いいんちよがめーっちゃ優しくて。私の為に、無理してくれて。

【ダウナーでありつつも嬉しそうに】

……えっちに、すごい興味あるって事」

〈主人公〉

「……え？」

● ※移動※

● 【1】

■ 正面に戻り、まっすぐ主人公を見つめながら話す。

素直な喜びに満たされる。今度は喜んでいいのだ、舞い上がっていいのだと思う

「【ダウナーでありつつも、最大限喜んでるのが伝わってくる感じで。

実際、喜びをこらえきれない。

『してくれてた』 Ⅱ 『キスを受け入れてくれた』
……へへへ。良かった。

嫌だったのにしてくれてたんなら、ほんとに申し訳なかったけど……。
違ってたのが、凄く嬉しい。

脈なしじゃないんだね」

〈主人公〉

「詩音、ちゃん……？」

●【1】

■また主人公を置いてきぼりにして、話を進める。

これはまだ頭がぼんやりしているせいでもあるのだが、詩音には自覚がない
「『頭もマシになってきた』 Ⅱ 『頭も比較的正常に働くようになってきた』」

お陰で、私の頭もマシになってきたし……。

今日からはさ、恩返しするからね。

いいんちよがこれまでしたいと思ってきた事、あたしが全部。

全部してあげるからね。

●※少し間をあげてから※ 話す

「主人公を喜ばせたり、その気持ちを汲み取れたりする存在になれた事を素直に喜んでい
るのと、抗いようなない事態を受け入れようとしているのと半々の気持ちで」
だって私、サキユバスになっちゃったんだから」

● ※移動※

● 「3」

「左耳にキスする。

喜びをこらえきれない感じで」

ちゅ♡

● ※少し間をあけてから※ 話す

「ふと思い出したような感じで」

ああ……そうだ。

説明、足りてなかったね。

さっき『いけそう』って言ったのは……。

『いけそう』の意味は。

● ※少し間をあけてから※ 話す

「※※までささやく※

ひそひそと嬉しそうに」

『淫魔の力、ちゃんと使えそう』 って事だよ……
♡
」
※

ここでフェードアウトして終了。